

読書について

司書課程委員会委員長 佐藤允昭

図書館員に求められる資質の一つは本好きであることだと学生にいうと、「何かお薦めの本はありませんか」と返されることがある。自分では本好きだと思っているが、このような場合すぐには返答が頭に浮かばない。そこで大抵「ない」と答えてしまう。

本を買うときには大分まで行く。できるだけ大きな書店で本を選びたいからだ。行くのは日曜日で、2、3時間は店内をぶらついている。気を引く本はたくさんあるが実際買うのは4、5冊ぐらい。そのあとデパートで食料品を買い、近くの喫茶店でコーヒーを飲みながら本のページをめくるのが日曜日の習慣になっている。

最近おもしろかったのは、スー・グラフトンの『獲物の Q』(早川書房)。女性探偵キンジー・ミルホーン・シリーズの一冊で『アリバイの A』からこの Q までアルファベット順に刊行されている。このシリーズの場合、探偵小説だから謎解きのおもしろさは当然あるが、それ以上に主人公に惹かれる。美人ではないようだがキンジーのシンプルな生活スタイルや自由な人生観が書き込まれていて、読めば読むほどキンジーファンになってしまうのだ。

ミステリーではほかに、レイモンド・チャンドラー、ロス・マクドナルドなど、いわゆる“ハードボイルド”ものに目がない。共通するのは、フィリップ・マーローやリュウ・アーチャーなど主人公の私立探偵が“カッコいい”こと。

ミステリー以外では、壇一雄、植草甚一、開高健、川本三郎、太田和彦などの著作が目に入れば必ず手に取る。この5人についてのイメージは“自由人”。何度も何度も読み返している。読むたびにほっとした気分になるから不思議だ。恰好のストレス解消薬になっている。

分野は異なるが『人は見た目が9割』(竹内一郎著、新潮社)もストレス解消になった。ことば以外のコミュニケーションについてわかりやすく説明している。新潮社からは同じテーマで『非言語コミュニケーション』(マジョリー・F・ヴァーガス著)という本もある。内容は少し高度だがこれも興味深く読んだ。

毎週書店に行って飽きることがない。行くたびに新しい本が並んでいる。気ままに手にとってぱらぱらページをめくるだけでも楽しい。誰にも干渉されない。一人で楽しむ。それが書店のいいところ。読書も同じ。ここをわかってほしい。ひとさまに本などお薦めしない本当の理由はこのようなことなのだ。

(さとう まさあき 別府大学教授 附属図書館館長)